

# 入学時の志望動機が保育士というキャリア選択に及ぼす影響

—志望動機の詳細記述の定量分析を通じて—

浅井 拓久也

## Effects of Supposed Career at Admission to Training School on Actual Career Decision at Graduation:

Through the Quantitative Analysis of Free Descriptions

*ASAI Takuya*

キーワード：志望動機、保育士キャリア、自由記述のテキスト分析、ロジスティック回帰分析

### 1 研究目的と背景

本論文の目的は、養成校卒業時に保育士というキャリアを選択するにあたって、入学時の志望動機がどのような影響を与えているかを明らかにすることである。入学時に記述された志望動機をテキスト分析することで、志望動機と保育士のキャリア選択との関係を明らかにする。

近年、国内外の実証的な研究から乳幼児教育の重要性が明らかになってきている。脳科学の研究では、言語、数学、社会的スキル、自制心の領域の発達における脳の感受性は誕生後3年間程度で限界を迎えることが指摘されている (Sophie Naudeau et al 2011)。また、経済学の観点から幼児教育の社会効果を分析した J. Heckman (2015, p.34) は、次のように指摘している。

幼少期の教育を上手に実行することは、大きな利益をもたらす可能性がある。ではもっと後になってからの介入はどうだろうか？ じつのところ、子供が成人後に成功するかどうかは幼少期の介入の質に大きく影響される。スキルがスキルをも

たらし、能力が将来の能力を育てるのだ。幼少期に認知力や社会性や情動の各方面の能力を幅広く身につけることは、その後の学習をより効率的にし、それによって学習することがより簡単になり、継続しやすくなる。(傍点原著者)

幼児期の重要性に関して Heckman がとくに重視しているのは、自制心や意欲、やりぬく力のような非認知的能力である。非認知的能力が人生の成功をもたらすことを縦断調査によって明らかにしている。

これらの研究成果は、平成30年施行の保育所保育指針改定の議論のなかでも取り上げられてきた。議論のまとめでは、「近年、国際的にも、自尊心や自己制御、忍耐力といった社会情動的スキルやいわゆる非認知的能力を乳幼児期に身に付けることが、大人になってからの生活に大きな差を生じさせるといった研究成果などから、乳幼児期、とりわけ3歳未満児の保育の重要性への認識が高まっている」というように適応性の高い乳幼児期への投資 (質の高い幼児教育プログラムの提供) や非認知的能力の重要性が指摘されている (厚生労働省 2016b, p.2)。

審議の過程でこうした研究が取り上げられたのは、保育所を利用する乳幼児の増加が背景にある。現在、保育所を利用する子どもは約250万人であ

り、そのうち低年齢児（1・2歳児）の利用率は約41%となっている（厚生労働省2016a）。指針改定の議論のなかで乳幼児期が子どもの人生を左右するという研究成果が重視されたのは、現在は多くの乳幼児が保育所で生活をしていることから保育実践の質が子どもの人生を左右するということと同じだからである。

保育所での保育の質が問われるということは、保育を営む主体である保育士の質が問われるということである。そのため、キャリアアップ研修など処遇改善と連動した保育士の専門性向上の機会が多くなってきている。しかし、保育士の質向上と同時に、そもそも保育士そのものが不足していることも大きな課題となっている。未来の保育士を育成する養成校の数は増加傾向にあるが、実際に保育士として就職する学生は必ずしも多くはない（全国保育士養成協議会2016）。保育士資格を得て保育所への勤務を選択した学生は46%という調査もある（厚生労働省2009）。もちろん、養成校に進学する学生のなかには幼稚園や児童福祉施設への勤務を志望して入学する学生もいるが、待機児童問題など保育に関する現代的な課題や保育所の増加率を前提とすると、保育所勤務を選択する学生が多いとは言えないであろう。

では、なぜ養成校の学生は保育士というキャリアを選択しないのであろうか。本問いに対する回答として給与や人間関係を指摘する調査・研究は多くあるが、ここでは養成校入学時の志望動機から検討することを試みる。

志望動機に着目するのは、次の2つの理由からである。まず、保育者養成校の特殊性である。養成校は保育士や幼稚園教諭のような保育者を育成する教育機関であり、学生もそれを認識したうえで入学する（大村2011）。文学部や経済学部への進学と異なる点である。学生がどの養成校を選択するかはキャンパスの美しさ、学費など様々な理由からであろうが、養成校そのものを選択する理由は保育士や幼稚園教諭の資格や免許を取得するためであることには変わりはない。しかし、卒業時には保育士はじめ保育とは異なる職業、職種を

選択するというのは、入学時点での見通しである志望動機や入学後から卒業までの過程に生じた要因が影響しているからである。すなわち、卒業後の進路が明確である養成校において学生の卒業時のキャリア選択に与える影響を考えると、保育・教育実習や授業内容などの入学後に生じる要因だけではなく、入口の段階である保育者の志望動機も検討しなくてはならないのである。

次に、先行研究との関係から、保育者の志望動機の分析が十分になされてこなかったからである。この点について、長谷部（2004, p.130）は「保育科や幼児教育科等の保育者養成課程への進学動機に関しては、保育者養成という目的が明確な学科・コースの性格上、これまであまり詳細に検討されてこなかった」と指摘している。しかし、先に述べたように養成校の特殊性からすれば出口のキャリア選択に入口の志望動機がどのような影響を与えうるかを検討することは保育者（以外）のキャリア選択をする理由を明らかにするうえでは不可欠であろう。

志望動機を対象とした先行研究では、（1）質問紙を用いて保育者を志望する動機と保育者としての資質・能力や卒業後に希望するキャリアとの関係を明らかにしたものと、（2）学生自身の志望動機の自由記述を用いたものの2つに分けられる。

前者については、長谷部（2004、2006）はどのような動機から養成校へ進学したのか、将来のキャリアの志望理由について質問紙を用いた因子分析を行い、学生自身の自己能力評価との関係を明らかにしている。横倉（1993）、田中（2002）、加藤（2009）、神谷（2010）、大村（2011）は入学時の保育者志望動機と保育者として就職したさいに必要なパーソナリティ特性、保育者効力感、希望するキャリアとの関係を明らかにしている。後者では、林（2014）は入学直後の学生に養成校に進学した理由や卒業後のキャリアとその理由を記述式で質問し分析している。

これらの先行研究は、量的あるいは質的調査によって志望動機に関するデータを得て、学生のキ

キャリア選択を検討したものである。しかし、いずれも調査をした時点での学生の考えるキャリアとの関係であり、実際のキャリア選択（実際に学生が就職した職業）との関係を問うものではなかった。とくに、志望動機と資質・能力との関係においては、保育士、幼稚園教諭など保育者としての資質・能力との関係であり、保育士との関係性を明らかにしたものではなかった。また、志望動機を自由記述で得た調査では、この結果を分析者の経験によって分類し、回答数を単純集計したり別の質問項目（変数）とクロス表にしたりするにとどまり、志望動機と実際のキャリア選択の関係を定量的に把握するところまでふみこんではこなかった。

以上をふまえると、先に示したなぜ養成校の学生は保育士というキャリアを選択しないかという問いは、志望動機との関係からすれば、なぜ入学時は保育士を志望していたにもかかわらず、卒業時に保育士というキャリアを選択しかつたのかという問いに変換できよう。本問いは、入学時に保育士を志望していた学生の志望動機はどのようなものか（小問1）、入学時の志望動機と実際のキャリア選択の関係はどうか（小問2）の2つの小問に分けられる。本論文では、この2つの小問を解題することで問いに対する回答を得ることを目指す。

## 2 研究方法

### (1) 調査対象

本研究では、指定保育士養成施設の四年制大学の卒業生を調査対象とした。調査対象として選択した条件は、(1) 入学時に希望するキャリアとして保育士が選択されており、(2) 選択の理由を示した志望動機が学生によって記述されており、(3) 2017年4月時点でどのようなキャリアを選択したかわかることである。この結果、保育士として勤務している（小規模保育所等も含む）113名、保育士以外のキャリアを選択した25名の合計138名を分析対象とした。

### (2) 調査時期・方法

調査時期及び方法について、調査は2017年5月に実施した。希望するキャリア、志望動機の記述は、入学時（2013年4月）に実施された調査内の回答を利用した。キャリアに関しては、「卒業後になりたい職業はなんですか。次のなかから選んでください。1、保育士 2、幼稚園教諭 3、どちらか悩んでいる 4、それ以外」、この選択の理由を問う自由記述は直後に「なぜそう思うのですか。理由を書いてください。」として質問された。本調査はアルバイト経験の有無、家族構成などの質問項目（選択式）も含まれていたが、こうした質問項目のうち本研究で用いる質問項目に著しく影響を及ぼすものはみられなかった。なお、志望動機の記述が入手できても白紙のものは除外した。

また、学生が選択したキャリアに関するデータは、内定通知の写しやそれに準ずる書類の提出もある学生の就職先申告書を利用した。本研究の目的からすれば実際のキャリアが重要であるため、大学に提出された就職先に実際勤務しているかを確認すべきという指摘もありえる。しかし、本調査は学生の就職先申告書のみならず内定通知の写し等もあわせて確認していること、学生が卒業してから1か月しか経過していない5月に調査を実施しているため離職している可能性も低いことから、学生が提出した申告書を利用することに問題はないと判断した。

以上で得たデータを IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0.1、SAS9.4 を用いて分析した。

### (3) 倫理的配慮

倫理的配慮として、入学時の調査では調査の目的と内容、回答は学術研究の目的でのみ使用されること、回答は自由意志によることなどが口頭及び紙面で説明されていたことを確認した。また、学生のキャリア選択に関しては就職先申告書を利用したが、学術研究や進路指導に利用されることに関する同意を得ていたことを確認した。また、本研究の終了後には分析に利用したデータを適切

に破棄する誓約書を提出のうえ研究を実施した。

### 3 結果と考察

#### (1) 志望動機のカテゴリ化

本研究では問いを2つにわけて回答を得ることはすでに述べた通りである。ここでは、入学時に保育士を志望していた学生の志望動機はどのようなものであったかについてテキスト分析を行った結果を提示する。

先行研究では分析者の主観的な判断に基づく分類がなされることが多かったが、本研究では次のように実施した。まず、分析対象となる138の記述を前掲のソフトに取り込み、カテゴリ化を行った。カテゴリ化においてはすべての抽出結果に対して言語学的手法で名詞のみを抽出した（最大検索距離は3）。言語学的手法を採用したのは、単なる感性分析や出現頻度による抽出では研究目的に合致しないからである。たとえば、出現頻度による抽出では、なる、思うという語が多く抽出される。しかし、これらの単語は「保育士になりたいから」（ID：74他）、「子どもを産んだときにも役にたてると思ったから。」（ID：101）のように目的とは関係のない分節化された単語の抽出になってしまう問題がある。

また、名詞を選択したのは、名詞は話題やテーマを表現し、記述者が何について語ろうとしているのかを明らかにすることができるからである。保育士を志望した理由として、子どもが好きだからという理由なら、必ず子ども（子、子供、子どもなど）という名詞が必要となることから、名詞を抽出対象とした。

次に、未使用のカテゴリを確認し、研究目的からカテゴリ化する正当性が担保できるものに限ってカテゴリ化した。カテゴリ抽出において言語学的手法を採用した場合、名詞に限定せず動詞や形容詞、要望などタイプに記載されているものを幅広く選択すると、膨大なカテゴリが登場し、そこからカテゴリを分析者が選択すれば結局は客観性が保てなくなることから本研究では名詞のみ選

択した。しかし、たとえば子どもが好きだから、（保育士への）憧れがあったからという理由に現れている好き、憧れのような言葉は保育士の志望動機として看過できないものである。そこで、未使用の抽出を確認し、好き、憧れ（る）という言葉に関しては好感と憧れというカテゴリを生成した。

同じ手法を採用している先行研究においても、ソフトによる自動的なカテゴリ生成や頻度抽出だけでは研究目的に合致した適切な分析が難しいため、目的に合致する分析者の視点を加えることや分析者による修正の必要性が指摘されている（山西2010、中田2011）。このような2段階抽出によって客観性を維持しつつ、かつ研究目的に合致するカテゴリを生成することが可能になったと思われる。

以上の手続きの結果、入学時の保育士の志望動機として、好感（45）、憧れ（14）、園（9）、職場体験（9）、子供（62）、保育士（21）、仕事（13）、親（2）の8つのカテゴリを生成した。括弧内数字は回答者数ではなく、レコード数を示している。各カテゴリのレコードの一部を以下に掲載する。

- ・好感
  - 「子どもが好きだから」（ID：10）
  - 「好きな先生にあこがれたから。」（ID：72）
- ・憧れ
  - 「保育士に憧れていた」（ID：22）
  - 「保育の先生に憧れたから」（ID：98）
- ・園
  - 「自分が保育園にかよっていたから」（ID：28）
  - 「通っていた保育園の先生がキラキラみえて、自分もなりたく思ったから」（ID：121）
- ・職場体験
  - 「保育園のボランティアをしてやりがいのある仕事であったので」（ID：52）

- 「保育のボランティアに行ってから」  
(ID : 129)
- ・ 子供  
「子どもが好きで子どもと接する仕事をしたかったから」(ID : 21)  
「子供と関わりたかったから」(ID : 40)
- ・ 保育士  
「保育士が少ないことからこうけんしたいのと子供が好きだから」(ID : 70)  
「保育士になりたいから」(ID : 74)
- ・ 仕事  
「大変だけれど、安定している仕事だから」(ID : 20)  
「子どもに関わる仕事がしたいから」  
(ID : 127)
- ・ 親  
「母親から保育士の話を聞いたから」  
(ID : 60)  
「昔から保育士になりたかったので、その夢があきらめきれないから」  
(ID : 114)

## (2) 志望動機とキャリア選択の関係

入学時の志望動機と実際のキャリア選択の関係を明らかにするために、8つのカテゴリ（志望動機）と実際のキャリア選択（保育士かそれ以外か）の関係について、前者を独立変数、後者を従属変数とする二項ロジスティック回帰分析をステップワイズ法（尤度比変数減少法）で行った。独立変数は各カテゴリ別に2値データ化した。従属変数の度数分布と構成は保育士のキャリアを選択（113、82%）、それ以外（25、18%）であった。分析結果は、表1に整理した。

表1によれば、ステップ7にて、保育士のキャリア選択には保育士という言葉がプラスの影響、憧れという言葉がマイナスの影響を及ぼしていることがわかる。つまり、入学時の志望動機と実際のキャリア選択の関係は、入学の時点で記述した志望動機に保育士と記述する学生は卒業時も保育士というキャリアを選択する可能性が高く、一方

で憧れと記述していた学生は保育士ではないキャリアを選択する可能性があるということである。この2つの言葉以外の好感、園、職場体験、子供、仕事、親という言葉はいずれも有意な影響を及ぼしていなかった。

表1 キャリア選択に関するロジスティック回帰分析の結果

	<i>Coef.</i>	<i>S.E.</i>
憧れ	-.202*	.125
保育士	.408*	.252
定数	1.48***	.242
<i>-2LL</i>		121.488
<i>Cox-Shell R<sup>2</sup></i>		.064
<i>Nagelkerke R<sup>2</sup></i>		.104

\* $p < .05$ , \*\*\* $p < .001$

## (3) 考察

以上の2つの分析結果をふまえると3つのことが言える。まず、憧れというカテゴリが保育士というキャリア選択にマイナスの影響を及ぼしていたが、養成校入学後の専門的な学習や実習経験を通じて保育士というキャリアの現実を知り、入学前の理想的なイメージとの差が保育士キャリアの選択回避につながったものと思われる。好感のカテゴリはキャリアに影響を及ぼしていないことを鑑みると、憧れという高い期待値をもって入学する学生ほど理想と現実の落差を感じるのではないだろうか。

保育士が保育のなかで行う言動は専門的な知識や経験に裏付けられたものであるが、それは学生には見えないものである可能性が高い。保育士の姿を見て憧れの感情をいただくのであろうが、それを身につけるためには学習と経験が必要であるが、この点が十分に考慮されていないと思われる。長谷部（2008, p.147）は保育士への憧れをもって養成校に入学したにもかかわらず保育職の選択をしない学生が見られることに関して「保育という営みが高度な専門性に裏付けられていること、養成校に進学後、多くの学習や実習経験を積むことの重要性やその厳しさ、保育者としての自らの資質能力等について真剣に考えるプロセスなしの進路選択が行われたことに起因するのかもしれない

い」と指摘している。長谷部も指摘するように保育士になるためには高度な知識を学ぶことが求められるが、養成校に進学する学生は国語や数学のような主要教科より音楽や美術のような技能教科を重視する傾向があり学習力が十分ではないことが多い（浅井 2017）。そのため、入学後の専門的な学習を乗り越えることができず、保育士というキャリアを選ばない（選べない）のではないだろうか。

次に、保育士というカテゴリが保育士キャリアの選択に有意な影響を及ぼしていた。これは、入学時に将来のキャリアが明確であることが目的意識のある意欲的な学習をもたらし、卒業時におけるキャリア選択へつながるからではないかと思われる。

養成校での専門的な学習には困難が伴うことが多い。実習経験をするなかで自分は保育士の適性がないかと悩み、保育士キャリアを逡巡する学生もいる（林 2014）。その過程で保育士ではないキャリアを選択する結果になるのであろう。しかし、入学時に保育士という明確な目標を立てていれば、難しい課題や経験に向き合う意欲や姿勢をもつことが可能となり、結果として保育士というキャリアにつながるのではないだろうか。実習がキャリア選択に影響を及ぼしているという研究成果があるが（日浦 2009）、本研究の知見をふまえると志望動機である卒業後のキャリアが明確であることが、実習に対して影響を及ぼし、キャリア選択につながっていると推察される。

最後に、キャリア選択に有意な影響を及ぼしていないカテゴリに関して、園（保育園）や仕事（保育の仕事）はキャリアに有意な影響を及ぼしていなかった。園は就職の場であり、仕事は職務内容である。また、園で働く専門職には管理栄養士や看護師もおり、保育を行う主体は子育て支援員などもある。これらは、保育士という言葉と比べると目標としては曖昧なため有意な影響にならなかったのではないだろうか。また、大久保（2015）によると職場体験（ボランティア）は養成校進学に影響を及ぼしているが、キャリア選

択には影響を与えていなかった。職場体験は保育に関心をもつきっかけにはなるが、保育士という言葉による明確な目標設定と比べえると、入学後に学生をゴールまで導く経験ではないのであろう。同様のことは、親というカテゴリが影響を与えていないことにも言えよう。入学後の学習や実習の実際を経験することで親がキャリア選択に及ぼす影響は消えていくのであろう。

#### 4 まとめと今後の課題

本研究では、なぜ入学時は保育士を志望していたにもかかわらず卒業時に保育士というキャリアを選択しなかったのかという問いに対して、志望動機の自由記述を分析することで解題することを試みた。具体的には、入学時に保育士を志望していた学生の志望動機はどのようなものであったか（小問1）、入学時の志望動機と実際のキャリア選択の関係はどのようなものであったか（小問2）の2つの小問に分け分析を行ってきた。

小問1では、入学時の学生の自由記述をテキスト分析すると好感、憧れ、園、職場体験、子供、保育士、仕事、親の8つのカテゴリを得ることができた。また、小問2ではカテゴリと卒業後のキャリア選択の関係を分析し、保育士キャリアの選択には憧れという言葉がマイナスの効果、保育士という言葉がプラスの効果と及ぼしていたことを明らかにした。

以上をふまえて本研究の問いに回答すると、入学時に卒業後の目標は保育士であると目標を明確にしている学生は保育士というキャリアを選択する可能性が高い。一方で、入学時に漠然とした保育士への憧れをもっている学生は高い期待値や理想と入学後の学習や実習の課題や難しさの差を感じ、それを克服できず保育士というキャリアを選択しない可能性が高い。子どもが好きであることは保育士キャリアの選択には影響を及ぼすことはなく、入学前の目標が明確であるか否かが重要であるといえよう。

養成校の目標は保育者を育成することである。

冒頭でも指摘した現代社会における保育士の質の確保という点からしても、保育士というキャリアの選択は社会的な要請でもある。本研究の成果をふまえると、入学時点で保育士に憧れをいだいている学生については現実と理想の差を補うような支援が必要である。授業を通じて、あるいは学生との個別的な面談などを通じて、憧れを実現するために学生一人ひとりに適した支援を用意していくことが、学生が保育士というキャリアへ確実に進むために必要なことである。

また、本研究の結果をふまえると、保育士の数を増やすためには入口の段階で保育士というキャリアを明確に志望する学生を増やすことではないだろうか。保育士という専門的職業、あるいはそこに至るまでの養成校での学習や実習には楽しさ、喜び、また厳しさ、難しさがある。明るい面だけ強調するのも、暗い側面だけ強調するのもなく、両面を丁寧に学生に伝えていくのである。養成校に入学する前に学生が保育士や保育について十分に考慮し、そのうえで保育士を目指して入学するということができるような工夫が養成校には求められるのではないだろうか。

今後の課題として、まず入口である志望動機と出口である保育士というキャリアの関係をつなぐ養成校での学習や実習の影響も考慮にいたれた全体的な分析が必要である。いくつかの先行研究では実習経験が学生が選択するキャリアに影響を及ぼしていることが指摘されているが、入学時の志望動機を考慮した分析をすることで、養成校の学生が保育士というキャリアを選択する道筋や要因を明らかにできるであろう。また、本研究では保育士とそれ以外という従属変数の設定であった。しかし、養成校では保育士以外にも幼稚園教諭や児童福祉施設の職員なども育成することが求められる。入学時の志望動機とこれらの保育士以外のキャリア選択との関係も含めた分析を行うことで、入学時の志望動機と実際のキャリア選択のより精緻なモデルを明らかにすることができるであろう。

## 引用参考文献

- 浅井拓久也・浅井かおり（2017）保育者の専門性向上につながる学びに関する一考察—養成校への進路選択の実態に着目して—。未来の保育と教育：東京未来大学保育・教職センター紀要。特別号。7-14.
- 長谷部比呂美（2004）保育者養成課程に学ぶ学生の能力自己評価と保育者志望の動機。お茶の水女子大学子ども発達教育センター紀要。2。129-137.
- 長谷部比呂美（2006）保育者をめざす学生の志望動機と資質能力の自己評価。淑徳短期大学研究紀要。45。115-130.
- 長谷部比呂美（2008）進学志望動機に関する検討—保育・幼児教育専攻学生を中心として—。淑徳短期大学研究紀要。47。135-149.
- 林富公子（2014）学生が考えるキャリアイメージ 1—保育者養成校における学年間の比較を中心として—。園田学園女子大学論文集。48。215-229.
- 日浦直美（2009）幼稚園教諭の専門職化に関する研究（1）幼稚園教諭志望学生の職業観を視点として。教育学論集。1。129-138.
- ジェームズ・J・ヘックマン（2015）幼児教育の経済学（古草秀子訳）。東洋経済新報社。（James J. Heckman. (2013) *Giving Kids a fair Chance*. MIT Press.）
- 神谷哲司（2010）保育系短期大学生の進路理由による保育者効力感の縦断的变化。保育学研究。48(2)。86-95.
- 加藤麻里恵（2009）保育者養成大学在学学生における進学動機、就職希望および保育者効力感。保育士養成研究。27。29-36.
- 厚生労働省（2009）保育士養成関係資料。第1回保育士養成課程等検討会。
- 厚生労働省（2016a）保育所等関連状況取りまとめ（平成28年4月1日）。
- 厚生労働省（2016b）保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ。
- 中田周作（2011）学童保育のあり方に関する自由

記述の分析. 中国学園紀要. 10. 199-207.

大久保義美 (2015) 保育系学生の「保育士志望」  
の背景にあるものは何か. 瀬木学園紀要. 9.  
70-77.

大村壮 (2011) 短期大学保育系学生の志望動機  
と資質について: 入学直後の調査. 常葉学園  
短期大学紀要. 42. 121-130.

Sophie Naudeau et al. (2011) *Investing in  
Young Children: An Early Childhood  
Development Guide for Policy Dialogue and  
Project Preparation*. THE WORLD BANK,  
Washington, D.C.

田中秀明 (2002) 保育者養成校における学生の学  
習理由と保育者志向性および学校適応感なら  
びに保育職に関する効力感との関係. 共栄学  
園短期大学研究紀要. 18. 167-177.

山西博之 (2010) 教育・研究のための自由記  
述アンケートデータ分析入門: SPSS Text  
Analytics for Surveys を用いて. 外国語教  
育メディア学会 (LTE) 関西支部メソドロ  
ジー研究部会 2010 年度報告論集. 110-124.

横倉聡 (1993) 保育系学科学生の就職に関する意  
識について—一般企業を目指す保育系学科学  
生の考え方とは—. 横浜女子短期大学研究紀  
要. 8. 79-96.

全国保育士養成協議会 (2016) 年度別指定保育士  
養成施設の入学定員の推移. 保育士養成のあ  
り方に関する研究 研究報告書.

浅井拓久也 (埼玉東萌短期大学専任講師)